

与論島の活性化のために

法文学部方政策学科 1 年

11144007704 野間 夏美

与論島を活性化させるためにどのようなことをすればよいか、このレポートテーマのそって考えるにあたり、まずは自分自身が今回の講義で与論島を訪れて感じたことを述べようと思う。

第 1 に観光について。講義の前にパンフレットが配布されたが、表紙に使われている写真は百合ヶ浜であり、内容もダイビングやバナナボートなどのマリンスポーツに関する広告が目立っていた。役場の観光課の方の話でも、夏場を集客の的にしているとのことだったから、やはり与論島の観光の売りは海であるようだ。他にもギリシャのミコノス島と姉妹協定を結んだり、ヨロンパナウル王国を建国したりと活動は多いが、これらはあまり着目されていないように感じた。

第 2 に農水産業について。与論町産業振興課の方から話を聞く機会があり、資料をもとに詳細な説明を受けることができた。まず感じたのは、台風による被害についてだ。塩害や風害、ビニールハウスの倒壊など、毎年深刻な被害が生じている。その理由は、琉球列島が台風の通路であると同時に、進路の転向点付近にもなっているため、台風の停滞する時間が長いことだ。

第 3 に神話や伝承について。現地では役場の職員の方に、与論島にまつわる伝承や神話にゆかりのある場所を多く紹介してもらえた。アマミク(南西諸島の開発祖神)とシニグク(アマミクの対の神であり、神名は稲穀の意)の乗った船が座礁した時に乗り上げたという岩や、島産の際に両神が三本の柱を打ち込んだという 3 の断層などが島の高台から一望できた。とても興味深い話だった。

以上をふまえて、前述にそう形で自分なりに与論島の活性化について考えたことを述べる。

まず、観光面。1 番のセールスポイントである海も、自分はいまいち押しが弱いと感じた。与論島観光ガイドによれば、本土最南端である鹿児島からでも船なら 20 時間、飛行機でも 1 時間 10 分と長い時間がかかる。与論島の海は確かに、“日本で最も美しい海” と評されるだけあって美しいが、そのためだけに長い時間を交通に費やして旅行に来る客はどれほどだろうか。事実、“ヨロン島入込客数の推移” によると、1972 年から 1979 年までその数は 45,539 人から 150,387 人まで増え続けたが、1978 年に沖縄線が開通してからは徐々に減り、2013 年には 54,093 人にまで落ち込んだ。観光課の方も、旅行客は沖縄に流れてしまったという認識があるようだった。たしかに沖縄にも観光の売りは多くある。沖縄美ら海水族館、首里城に、古宇利島などが特に旅行客の関心を引いているのが現状だ。そこで、自分は沖縄と連携して旅行プランを立てることを提案したい。沖縄から与論島まで船旅を楽し

んでもらい、帰りは与論島から飛行機を利用する。観光として沖縄を訪れたい人も、与論島を訪れたい人も満足してくれるのではないだろうか。

次に、農水産業面。資料を読みこみ自分が考えたのは、今行われている以上に畜産に重きを置くこと。作付面積はサトウキビが 489ha、飼料畑が 364ha。生産額はサトウキビが約 4 億 900 万円、畜産が約 8 億 9 千 100 万円。全くの素人意見だが、これならばサトウキビの生産よりも畜産に力を入れた方が利益は多いのではないか。面積 20.49 平方キロメートルという小さな島では作付面積も限られてくるというのも理由の 1 つだ。

最後に、与論島の神話や伝承について調べていて感じたのは、なぜこれらを観光の売りとしてもっと前面に押し出さないのかという疑問だった。

2 人の神による島生み、羽衣伝説、アアジンケエの伝説物語など興味深い神話や伝承が多く、しかもその多くが『古事記』や『日本書紀』に記されたものと類似し、かつより詳細に伝えられている。加えて、本来いわれのある場所を巡るというのは手間のかかるものであるのに、与論島においては、小さく、しかも木が少ない平坦な土地柄のおかげでさほど苦にはならないと思われる。神話や伝承に少しでも興味のある人なら喜んで訪れてくれると思う。

大きく 3 点に分けて自分なりの考えを述べたが、島の活性化について真剣に考えたのはこれが初めてであり多く見落としている点もあるだろう。しかし自分は、1 人でも多くの人に与論島の魅力を知ってもらいたいと考えている。講義から帰ってきて真っ先にしたことといえば友人に島の写真を見せながら自然の美しさ、神話や伝承の数々を延々語ることだった。このつたないレポートを読んで、少しでも与論島に興味を持ってくれた人がいるなら、次回の長期休暇の行き先として是非とも与論島を検討してみしてほしい。